ものではないといっているのではない。むしろ逆だ。人間の生き死にはちゃんと虫の生き死にに匹敵するといっている。」

この箇所を読んだとき、書いた人の動きと読むわたしの動きが共振したときの、わ、というあれが起こってキューッとなった。続けて読んでいくと山下さんはこうも書いていた。

「この本のつまらない箇所は相談の文だ。内容ではない。それを書いた文がつまらない。」

「そもそもぼくはこの本の全文を読んでいない。読みたいところだけ読んだ。目に止まった、それもたまたま止まったものだけを読んだ。だからあやうく最後に深沢七郎がまとめて書いてある文を読まずに済ましてしまうところだった。」

ひどく場違いな集まりかなんかにうっかり出席してしまって居心地の悪さにじっと耐えていたところへ、友達のよく知った顔が突然あらわれた、とかそんなような種類のうれしさだった。二〇一八年の暮れに『ほしのこ』という本と出会っていたから山下さんのことはすでに知っていたけど、『ほしのこ』が好きすぎて他の作品は読んだことがなかった。『ほしのこ』との出会いの入り口はツイッターで、偶然目にとまった森田雄三さんのブログへのリンクを踏んでそこに書かれていることを読んでいたら山下さんのことが書いてあって、この人の書いたものを読んでみたいな、とにかく一度現物に触れてみよう、となり、わたしの住む島には図書館がないから近くの大きな島の図書館の蔵書を検索したら3冊だけあって、そのうちの1冊が『ほしのこ』で、船でこちらの島まで送ってもらって読んだ。このときも、わ、というあれが起こった。

《これ》を書いてくれた人がこの世に存在することが信じられなかったし、本当にうれしくて、興奮のあまり東京に住むマブダチのしいねはるかちゃんにメールしたのを覚えている。やばい本と出会ってしまったよ!! はるかちゃんはつねづね、「島では手に入ら